



一般社団法人日中化粧品国際交流協会 Japan-China Cosmetic Exchange Association

〒650-0045 兵庫県神戸市中央区港島南町 5-5-2 神戸国際ビジネスセンター TEL : 81-78-381-5304 FAX : 81-78-303-3077

<http://www.cosmo-jc.org>

2017年9月19日～21日、中国の化粧品業界メディアである「聚美麗」主催の2017年美麗互聯・挑戦者大会が開催され、合計約300名の化粧品業界からの参加者が集まった。大会の3大パートの一つである「製品と研究開発の創新フォーラム」は9月21日に杭州国際博覧センター(G20会場)にて開催され、日中化粧品国際交流協会の理事長である楊建中博士と専門家委員会の専門家である杉浦俊作先生も登壇した。



楊建中博士

楊建中博士は「日本化粧品業界の技術創新と最新動向」について講演した。講演では、IFSCCでの日本企業の受賞数が39個と最も多く、ここからも日本の技術は世界においてもトップに君臨していることは明らかであると紹介した。そして、化粧品の基礎研究に応用できる最高権威たるノーベル賞受賞を二つ解説した。

一つ目は2012年のノーベル医学賞を受賞した山中伸弥教授のiPS細胞である。著名化粧品企業コーセーのiPS細胞の原理を利用して開発された美容液「iP.Shot」について紹介。

二つ目には、昨年ノーベル医学生理学賞を受賞した大隅良典教授の「オートファジー」の仕組みについて解説し、これを応用した花王、富士フィルムそしてポーラの技術と製品について紹介した。

日本化粧品業界の最新動向には今年の1月に発売されたポーラの美容液「リンクルショット」を皮切りに、日本では「シワを改善する」化粧品に火が付き、資生堂を始めとする大手企業が次々この領域に乗り出したと説明した。

最後に日本の化粧品企業が基礎研究に注力し、理論の礎をしっかりと築くことによって製品のニューコンセプトの創造や技術の開発につながっていると明言した。この基礎研究を支えているのが、大学などの研究機構や大企業内に設置された専門的な研究開発部門、そして業界内での定期的な開催される学術交流であるとまとめた。これが日本化粧品業界の実力が世界トップを走り続けることができる由縁であり、中国化粧品業界に基礎研究の重要性を呼び掛けた。

もう一名の協会のデザインの専門家である杉浦俊作先生も「イノベティブなパッケージデザイン戦略」について講演した。以前資生堂で約50年間勤められた杉浦先生から見て、パッケージデザインとはヒトとモノが接する重要な創造であり、優秀な中身のみでは完成品の美を表現できないという。製品のパッケージはまるで人の衣服のようにただ体(中身)を保護する目的だけでなく、人の個性を表現するものであると、パッケージデザインの重要性を説いた。



杉浦俊作先生

まず製品デザインのコンセプト、キーワード、キーカラーの決定から始めて、スケッチそして模型作成というデザインのプロセスについて実例を交えながら説明した。それからイノベティブデザインのための重要な3要素—明確なマーケティング、的確なデザイナーの選定、依頼事項の明確化についても解いた。

化粧品の基礎研究とパッケージデザインの領域ではまだまだ発展途上にある中国化粧品業界にとって、今回の楊博士と杉浦先生の講演内容はとても斬新であり、参加者たちはたいそう感銘を受けたようであった。